
召喚なんてやるもんじゃない

大林秋斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚なんてやるもんじゃない

【Zコード】

Z4634V

【作者名】

大林秋斗

【あらすじ】

魔法科の編入生ミアナは、授業の遅れを取り戻すべく、放課後、課題である転移魔法の練習をしていた。詠唱してもなかなか発動しない魔法。時間をかけようやく発動したのだが、彼女がかけた魔法は課題の転移魔法ではなく召喚魔法をかけてしまっていたのだった。サイトからの転載です。

どうしてこうなってしまったの？

……。

わたし、ミアナ・マージュ。

王都にある名門校、アンジュー高等学院、魔法科に所属する1年生。アンジュー学院は国の貴族や富豪の子女たちが通う学院だ。もちろん、例外もあるけれど。

魔法科はそんな例外な生徒を受け入れている科だ。

この科は身分や貧富に左右されることなく、魔法に優れた生徒たちが集められている。

わたしもその一人で。

ほんの数か月前は王都からずっと離れた田舎で暮らしていた。

わたしの両親は農夫で、わたしはその次女として生まれた。

兄弟は兄二人に、姉と弟がいる。

上の兄はすでに結婚していて両親と同じ農夫をしている。

姉も近くの農家の息子と近々結婚する予定だ。

わたしも、兄や姉のように、近隣の農家に嫁いで畠仕事に勤しみながら一生を送るのだろうと思つていた。

そんなとき、国から視察団の一行がやってきた。

わたしの居る国、アルデンス国は治安が良い。なんでもわたしの曾祖父の代には荒れてたそんなんだけれど、祖父の時に新しく国王陛下になられた現大公殿下（今は国王を譲位なされて大公として隠居生活を送られている）が、わたくしたち下々の治政を抜本から見直し、大改革を行つた。

不正を働いていた中央の役人の排除から始まり、地方では、領民から不當に税を取り立てた領主を罰したり、その手腕は見事だったそうだ。

（祖父は「ことある」とこ、熱く当時のことを語る）

その頃からの慣習で、年2回、王都から離れたこの田舎の領地にも、国の視察団が来るのでだ。

視察団は、一級騎士や魔道戦士たち、王都を支える煌びやかな人たちで構成されている。

辺境の田舎に来るとするべく田立つ。

この春に来た視察の一一行がわたしに目を止めた。
我が家家の畠の生育状況を見に来てた時だつた。

農家はわたしの家だけじゃないけれど、採れる作物の質がいいことと、田畠が領主の館に近く、王都に出荷している花も栽培しているからとの理由で選ばれたのだ。

畠仕事の様子を見るのも視察の一環だからと、祖父母、両親、兄たち夫婦や姉、弟といつしょに苗たちの世話をしていたら、両親とわ

たしが視察の一団に呼ばれた。

何か粗相があつたのかと、びくびくしていたら、アンジュ高等学院魔法科への入学の勧めだった。

一家の中ではわたしだけ、魔力があつてそれも半端ない量だとかで、このまま田舎の農家で一生を終わらせるのは惜しいということなのだ。

両親はその話に困惑したようだつたけれど、わたしたちからの話を聞いた祖父は感極まつた表情をした。

そして、わたしに王都に行くよつ促した。

祖父は、大公さま大好き、王族大好きな人だから。

その大好きな王族、國のお役に立てるなら、こちらからお願ひしても行けと言わんばかりな勢いだつた。

その勢いに押され、あれよあれよといつ間にこの学院の女子寮を借り編入していた。

1年からとはいえ、中途からの編入だから、当然他の生徒たちとは理解度に開きがある。

授業にも追いつけなくて、放課後残つて自主学習するのが常になつていた。

今日もその自習中。

今月の課題である転移魔法の詠唱を繰り返していた。

転移魔法の基礎的なもので、机の上に置いた羽をほんの少しでも動

かせれば良いのだけれど、わたしが何度も詠唱しても、羽根は机の上に縫いとめられたように動く気配がない。

先生は魔法が発動しないのは、わたしの発音が悪いからだと言った。う行の発音するところを一行でしているそうだ。

自分ではちゃんと発音しているつもりなんだけれど、地方の言葉の訛りが出ているやつだ。

自習を始めたときは明るかつた空が今ではすっかり暮れて暗くなってきた。

ああ、羽動きそうもないな、

いつになつたら正しい発音で詠唱できるようになるのだろう。

一人になると、やっぱり故郷のことを思つてしまつ。

畑の花は青のブルーデジエヌの薔薇があがる頃ね。

一家総出で収穫の準備しているのだろう。

畑仕事は1日の終わりになるとくたくたになつたけれど、収穫された野菜や花たちを見ると、そんな疲れも忘れてしまつくらい愛しかつた。

いけない、課題に集中しなきや。

余計なことを考えずに詠唱しなきや。

発音、発音。

わたしは氣を取り直し魔法を唱えた。

何回も繰り返して、ようやく詠唱の効果が現れた。

でも課題通りに「羽が動く」ではなくて、とんでもない方向に……。

動かす予定の羽は、今は見えない。

羽のあつたと思われる場所に、青の詰襟に幾つかの勲章が付いた服、腰に帯剣を纏つた、30歳くらいの背の高い男がいる。机の上に腰かける人物、短く切りそろえられた白色の髪に青色の瞳を持つ美麗な男が、わたしを睨み付けていた。

「あなたは、分かつているのですか？」

低く冷たい声が教室に響く。

「宰相さま、おゆぬしくださいー。」

わたしは即座に足を曲げ床に手を付き平伏した。
わたしはパニックに陥っていた。

王都の催しで、学院の生徒たちが招待されたとき、数回遠田で見た人物だ。

それでも印象に残つてたのは、柔らかく慎ましい微笑だ。

その宰相さまがひどく怒つていらっしゃる。

宰相さまは机から腰を下ろすと、平伏するわたしに近づいた。

「王宮にあつたわが身を召喚などありえない！……許してはならない」

わたしの顎を掴むとくいと顔を上に向かせる。

宰相さまと目があつてしまつた。

わたしは恐ろしさで竦みあがつた。

涙がぽろぽろ流れてくれる。

お許しくださいと、何度も何度も宰相さまに懇願した。

宰相さまの目がすつと細められた。

ああ、
怖い。

これがうちれかしはどぶがるのでし、どぶ

しょうか。

「みんなさー、

魔法なんて、召喚なんてやるもんじやないんです。

まさか、こんなに囚われてしまつとは。

...

初めて彼女を見たのは、僻地の視察の時だつた。

年2回の公的な視察ではなく裏の、非公式な視察の時だ。

そこで彼女、ミアナに会つた。

その時わたしは今の宰相職ではなく一隊の魔道戦士長で、彼女は10歳に満たなかつたと思う。

彼女の畠では甘酸っぱいヒラウの果実の収穫をしていた。

彼女も腰を屈んで草に成つたヒラウの実を摘まんでもかこに入れていた。

彼女を見たとき、魔力を持つてゐるのが感じられた。

でもまだその時はほんの微量で、実用できるレベルではなかつた。

わたしが彼女の魔力を感じたように、彼女もわたしの魔力を感じ取つたのだろうか。

目立たぬよう身を隠していたわたしを見つけると、摘んだばかりのヒラウの実を籠からひとつ取り出した。

「うちのヒナウはおいしんですよ、旅人さん、どうぞ」

と、翠の大きな目を細め、うれしそうな笑みを浮かべて差し出した。

彼女の笑顔は採れたてのヒラウの実のようにみずみずしく透らしかつた。

それからも、彼女のいる地方へ視察に行く際は、彼女をもこつそり観察した。

彼女の持つ魔力に変化があるかどうか気がかりだつたからだ。

王都にあるアンジュ学院は魔力ある平民をも受け入れる。

それは有望ある魔道士の育成という目的もあるが、彼らを敵国から保護する役目もあるからだ。

魔道を扱う者は、各国とも非常に数が少ない。

その分魔道士は見いだされると国家の戦力として優遇されるのが常だ。

当然数が少ない魔道士は狙われる対象である。

他国に嗅ぎ付かれる前に有望な魔道士の卵を保護しなければならぬい。

当面、彼女の魔力に変化はなかつた。

しかし6年たつたこの春に、状況は変わつた。

宰相に就任してからは、わたし自ら地方に行くことはなくなつたが、報告は受けていた。

そして彼女の魔力が以前よりも増す兆候があるということを知つた。ただちにアンジュ学院への編入の手続きをするよつ、宰相として部下に命じた。

入学した彼女、ミアナ・マージュは確かに以前より多くの魔力を有していた。

しかし、魔法科としての成績は良くなく、むしろ最低だつた。

農仕事ばかりをしていたから他の学生より遅れを取るのは当たり前だと思っていたが、それだけが理由ではなかった。

ミアナの詠唱する発音に問題があった。

彼女は「ラ行」をきちんと言えない。

「ラ行」の音は「ナ行」になる。

詠唱に「ラ行」のない呪文はほとんど存在しない。

ラ行の言えない魔道士は当然、戦力外だ。

他国に即、狙われる心配はなくなつた。

それでも、豊富な魔力をミアナが抱えていることは変わらない。

さて、どうしたものか。

と思つていた時に、彼女の詠唱した魔法で、宰相の執務室から、アンジュ学院1年魔法科の教室の机の上に召喚された。

ミアナが言つには、移動の魔法、机の羽を動かす魔法の詠唱をしていたと言つたが、その魔法がどうしてこうなつた? よりによつて人を呼び出す召喚魔法なんかに。

かかつたのが同じ国で、彼女の事情を知るわたしから良いものを、これを他国のそれも重職にある人物を呼び出していたとあつては、国際問題になる。

「あなたは、分かつているのですか?」

わたしの口調がつい厳しいものになつても仕方ないだらう。

ミアナは即座に震えあがつた。

「ぬぬしてください」と例のナ行の発音で謝罪の言葉を囁く。

わたしはすぐに言い過ぎたと後悔した。

「王都にあつたわが身を召喚なんてありえない。（このよつた事態にならないよう、わたしの田の届かない範囲での詠唱は）許してはならない」

わたしは屈み、平伏して顔を下げていたミアナの頸を持つ。上向きにさせて顔を覗き込んだ。

ミアナは長いブラウンの髪をふるふる震わせ、大きな翠の田からぽろぽろ涙をこぼしてくる。

なんだこのかわいさは。

目が離せない。

ミアナはとても可憐だった。

とくんと波打つ打つ、自分の心臓の音を感じた。

その後わたしは、魔道の説話で学院の理事長、王都にいる陛下と王太子に連絡した後、ミアナを連れて自宅の邸宅へ行つた。

ミアナは自分がどんな処罰を受けるのかひどく恐れおののいていたが、すべては詠唱魔法の発音違いが引き起こしたこと。

彼女を落ち着かせた上で、ラ行がきちんと発音できるまで学院は休学し、我が邸宅の侍女として暮すよう約束させた。

「なトアーヌさま」

アナが邸宅に来てから二か月たつた。

わたしの名は、ラトアールだ。

相変わらずラ行の発音は悪いまま、わたしを「なトアーヌさま」と呼ぶ。

でもわたしは「ことわらされに田へじりを立て直そつとは思わない。

彼女の訛った言葉はとても變らしく。

魔法の練習は週に一度している。

それは実益を兼ねての魔法。

それもう行の入らない魔法を中心にしている。

邸にある温室の気温を調節する魔法がそうだ。

温室はミアナが来る前は放置状態だったが、彼女に管理を任せている。

気温の調節の呪文にラ行は含まれていなかつた。

ミアナは、故郷の畠で育っていた野菜の苗や花を植え育て始めた。

温室にいる時のミアナは生き生きとしている。

自分の魔法が効き役に立つていてることもあってよみこつれしこうだ。

ミアナの魔法は、ラ行抜きだと思つた通りに苦もなく発動するようだった。

難度の低い高いに関係なく。

祖父の言葉を思い出し、学園に復帰したい素振りも見せるが、まだそのレベルには至っていないと言ふに含め許可していない。

もとより、彼女を学園に復帰させる気など全くないのだが。

王城の執務の休憩時間に王太子とお茶を飲みながら話をする。殿下とは彼が小さい時から遊び相手として傍に仕えていたので、その分気安い関係ではあった。

このところの話題は、わたしの邸にいるミアナのことがだ。ことあることにわたしをからかう。

「なトアーヌちゃん、なんてかわいく呼ばれてるんだ?」

「殿下、今飲んでるお茶を、すぐさま口内が爛れるくらいに熱くしてさしあげますよ?」

「おおこわつ、それは勘弁。悪い冗談はやめてくれよ、なトアーヌちゃん?」

「殿下...」

「「めん、「めん、本氣で怒るなよ」

王太子はくすくす笑いながら田へばせをする。

「それより、まとまつたようだね、ニアナの養子縁組の話」

王太子は机上に広げられた書類の中から一枚を取り出す。殿下の言葉にわたしの顔に一瞬に朱が走った。

「父上も喜んでいたよ。ようやく堅物のなトアーぬちゃんが身を固める決意をしたのかとね」

……もう王太子のからかいに、いちいち文句を言ひ氛も起きない。

そう、わたしはニアナと婚姻を結ぶべく環境を整えていく。わたしと身分の釣り合ひ貴族と養子縁組をせてから後、妻に迎えようと準備していた。

ニアナがわたしを召喚した魔法はいわくつきのものだった。

ラ行をナ行に変換した転移の初步魔法。

国家機密の文書を集めた書庫にその答えがあった。文書によるとその魔法は禁呪された古代の魔法。

血の一生の伴侶を呼び出すもの。

それは異界だらうが関係はなく働くもの。

呼び出される人間の人権が損なわれるからと、（こきなり呼び出されればそれは人攫いだらう）禁呪とされていた。

それでも、召喚は相当上級の魔道士が魔力を蓄えようやく成功する魔法である。

ラ行読み違えただけのミアナが成功させた。

そこにも驚きだが、彼女の伴侶にわたしが呼び出されるとは……。

そして魔法に、ミアナにすっかり囚われてしまった。

わたしは、そのことをミアナに伝えていない。
もちろんプロポーズもまだしていない。

ミアナは16歳、わたしとはずいぶんな年の差がある。
ミアナの前だと素直に自分の気持ちが言えない。
(王太子に言わせると、通常のわたしは素直とは程遠い人物だとうが、ミアナの前では分かりやすい性格をしているとか……)

召喚なんてやるものではない。
けれど、その存在をわたしは否定しない。（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4634v/>

召喚なんてやるもんじゃない

2011年8月3日10時35分発行